

丹羽文雄

無慚無愧

文藝春秋

無慚無愧

著者 丹羽文雄にわみお

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

印刷 理想社印刷

函印刷 凸版印刷

製本 中島製本

製函 加藤製函

定価 九六〇円

© 1970 FUMIO NIWA Printed in Japan

昭和四五年四月二五日発行

無
慚
無
愧

住居と隣あつた倉庫から、いつときかけ声が聞えていた。かけ声で男たちのかついでいるものの重量が判るようであつた。ずしりと重いものが、男の肩と背中であけとめられる。うけとめた呼吸が、男の口からかけ声となつた。肥料のはいつたかますである。倉庫から表に待っている荷馬車のところまで、男たちは何回も往復した。かけ声がやまる。しばらくすると馬方が馬の尻に鞭をあてる音と、「それッ」と叫ぶ声が聞えた。馬は全身の力で始動を開始する。地響きをたてた。荒々しく力強い速度が感じられた。やがて荷馬車の音は遠ざかった。

あつしの前掛すがたの通次が、店の間にはいつてきた。帳場に坐つて筆を動かしていたが、横に細長い部厚な帳面を閉じると、立ち上った。倉庫から荷馬車のあったところまで、わざとまいたようなこぼれた肥料を、使用人が掃いていた。通次は廊下に出た。

「良子」

と、妻を呼んだ。（妻はいないさ。さっき子供をつれて外出したのを、倉庫のところで見ていたのだ）通次は居間にはいった。炊事場の方でさかんに水音がしていた。

「良子はいないか」

「はい」と答えて、蓮子があらわれた。

「いないのか、良子は？」

「さっき謙ちゃんをつれてお姉さん買物に出かけました」

蓮子はあるかなしかの微笑をうかべた。（この娘、いつも微笑している。無意識なへつらいか。意味のない表情だ）通次は二階に上った。二階の二夕間は客用で、ふだんは使わない。戸がしまっていた。蓮子がこの家に来てから、通次は二階で眠ることになった。妻と子供と蓮子がひとつ部屋で眠るのが習慣になっていた。通次が二階から下りて来た。

「蓮子」

妻の居間にいる蓮子に通次が声をかけた。蓮子はすでにいろいろと細かいものを買いあつめていた。それを整理していた。

「二階へいってごらん。床の間に面白いものがあるから」

蓮子がのそりと立ち上った。面白いということばに誘われた。「何ですか」

「まあいって、みてごらん」

蓮子が階段をふんだ。（珍しいことだわ。お義兄さんが私に用をいいつけるなんて……）
それも、特別に私をめざして……）たびたび蓮子は姉の家に来ていたが、義兄は蓮子の子供扱いにした。少女のころから出入りしていたせいもある。が、ここ一、二年の蓮子の成長のめざましさが、よくわかっていないようであった。嫌われているのかと思われるくらいだった。妹の味を知らない通次は、扱い方を知らなかった。蓮子は二階の、床の間のある方の座敷にはいった。床の間に五、六枚の絵のようなものが置かれていた。（これかしら）絵とすれば、子供っぽいことだ。手にとって蓮子はびっくりした。うすく彩色された秘画であった。かなり古いものようであった。男も女も美しい顔をしているが、動い

ていなかった。(なるほど興味があるわ。はじめて見た。こういうものがあるということ
は聞いていたが、見るのはこれがはじめて。お義兄さんはこんなものを、かくしてもって
いたのか) へんにとりつきにくい義兄の一面をのぞいたという気がした。奔放な肢体に蓮
子は魅せられた。いずれも蓮子の経験のない体位であり、動きが感じられた。秘画に見と
れている自分を義兄がどんなふうに見像しているかということは思わなかった。蓮子はゆ
っくり一枚ずつ眺めた。(何故彼はこれを見せるのか。ふだんまるで子供扱いだわ。
子供扱いをやめるといふのか) 義兄とすれば、心の裡をのぞかれたのを承知の上だった。
(何故か、何故か) すると、蓮子の口もとに微笑がうかんだ。(これは義兄ひとりの工作で
はあるまい。姉が協力している。もしかしたらこの秘画は、実家のものではなかったか。
母が嫁いでいく姉の嫁入簞笥の底にひそかに入れたものではないか。娘に対する母親の最
後の教示だったのではないか) 蓮子はすでに両親を失っていた。姉が母に代って、蓮子に
対して最後の教示を垂れたという解釈は妥当であった。代々くりかえされてきたことであ
った。最初のおどろきが消えた。(肉親らしい心使いだわ。奥ゆかしいやり方) 姉がこの
画に接したときの感情が蓮子に想像出来た。蓮子は、わかったと思った。それにしても虹

をながめるような発見だった。（これからは大人っぽい顔をしなければならないのだわ）

階段に足音がした。蓮子はもとどおりに画を置いた。義兄がはいってきた。

「面白いだろう」

「ありがとう。新しい知識だわ」

と答えるつもりだったが、ふりかえった蓮子は謎めいた笑顔になった。義兄はつつ立ったままあつしの前掛をはずしにかかった。（この微笑は何を意味するのか。この娘は当惑もしていない。恥しがってもいない。こんなものを見せられたことで、はらもたてていない。まるで共犯者のような狎れ狎れしい微笑だ。私の工作を笑っているのか。それとも解釈のしようがなくて、困って笑うのか）義兄は蓮子の膝のところにかがむようにして、

「今日まで一度もじっくり蓮子の顔を見ることがなかったと気がついたよ」

蓮子の両手を取りあげた。瞳を見入るようにした。腺病質な肌をしていた。青白い生地
に毛が濃いくらいだ。うけ唇で、顎がすこししゃくれていた。生え際にうぶ毛を残している。指の長いきれいな手だが、十分に肉がついていなかった。女にしては柄が大きい。
からだ全体にごつごつした感じがあった。蓮子は娘ならたれもが結っている桃割れを結わ

なかった。頑固に束髪をつづけていた。

「ごめんよ。本心はちがうんだ」

笑いながらとったままの手をひきあげ、義兄が立ち上った。蓮子は従った。肩に手をまわすと、つぎの部屋に誘導した。南向きの高いところに四枚の障子をはめた窓があった。春の陽がいっぱいあたっていた。明るすぎて、あたたくて、静まりかえっていた。義兄が坐ったので、蓮子も坐った。義兄は無言だった。何気なく、いきなり行動に移った。進行がはじまると、前もって話があったようにすらすらはこばれた。呆氣ないくらいにはこばれた。が、蓮子にはおどろきの連続であった。（これだったのか）せっかくの心得となった秘画は、他日のためでなく、即席のためであった。

「束髪をつづけているのは、がんこだね」

と、義兄が余裕ありげにいった。ふたりは狎れあった行為の中にいた。義兄のもとどりの傾いだのを見ると、蓮子は頭部を浮かせるようにつとめた。それはかなりの努力であった。微笑をうかべなくなった瞳は、義兄をみつめている。そのくせ動作にはじめじめしたところがなくて、開放的であった。日当りのよい春の日和の縁先で小猫が仰向けになって

思いのままに四肢をのぼしたり縮めたりしているのに似ていた。健康的で、野性じみてふるまっている自分のことが、本人にはわかっていなかった。それはいかにも自然であった。髪だけは崩してならなかった。髪はこわれなかった。これ以上その心配がなくなったときになっても、蓮子は右肘をうしろにひいて、頭部を宙に浮かせ、姿勢を持続した。うしろにひいた右肘がしびれてしまったのか、すぐにはもとに戻らなかった。義兄がはなれたときのままの姿勢をつづけた。その顔には不安がなかった。おそれも羞恥もなかった。蓮子は静かに横たわっていた。秘画にもひけをとらない手足の美しさをみせていた。膝から腿の線はことのほかみごとであった。

義兄はもとどりを直しながら階段を下りた。帳場に坐った。きせるをくわえたが、齒が必要以上にきせるを噛むのに気がついた。正坐していたが、義兄のからだのいちばん奥深いところであつてゐるやうであつた。（異常な行動のせいだ。心のせいもあるやうだ。やがて鎮まるだろう）しかしそれは、たんに自分の行為のせいだけではなかったやうである。大きなおそれのやうであつた。階段の方を気にしていたが、下りてくる気配はなかった。（何という娘だ。泣き出しもしなかった。さからいもしなかった。ひとことも口を利

かなかった。自分の顔ばかり見つめていた）それが義兄には納得がいかなかった。はらだたしかった。はかられていたような気がだんだんとしてきた。（まるで経験者のようなこなし方だった。ああいう場合はたれにしても愛情の確証をもとめるはずだ。男の心を見抜いていたようにはじめからしまいまでひとことも口を利かなかった。まるで野育ちの女のようにふるまった）子を生んだ妻ですら、いまになっても羞恥心を失っていないのである。（何という女だ。大胆といおうか、白痴といおうか）しかし、ふだんの蓮子はこまかく気のつく娘だった。動作にいくらか緩慢なところがあつたが、それは柄の大きなせいだった。

なかなか二階から下りて来ないので、義兄は心配になつて二階に上つた。蓮子が美しい足を投げ出していた。静かな、ぼやけた顔をしていた。（泣いているのかと思つた）蓮子の眼が微笑した。義兄は階段を下りた。蓮子は、反芻していた。たしかめていたのだった。予習もなく答えられた自分におどろいていた。肉体の中の可能性が心をゆたかにしていた。酔い心地のようであつた。（ありえないことではなかったのだ）無知のせいから秘画の中のはありえない体位と思つたものである。しかし、よくわかつたとはいえない。蓮子は

不思議な心境に気がついた。姉の良人として、十八も年上の、親しみにくい、こわいような大人と感じていたのが、蓮子は一挙に溝をとび越えた。それと引きかえに親狎があたえられたようであった。(義兄なんてすこしもこわくない) 蓮子には、うんと年齢のちがった夫婦がむつまじくくらししている秘密がわかった。義兄が前々から自分に関心をもっていたことを信じた。機会はいくらもあった。蓮子は二月月に一度か、三カ月に一度のわりで姉のところ滞在していた。(しかしこれが最後で、私はこの家には来られなくなるのだ。

義兄はそのことを考えていたのか。私はまだこの家に二、三日滞在するつもりでいる。そのあいだによくおぼえておくこと。もらった親狎をたしかめること。だけど、それ以上の滞在は出来ない) 姉の帰宅したようすはなかった。が、何かの用でたれかが探しにくるか知れなかった。蓮子はこの場から動きたくなかった。動けば、せつかくのものが失われるような気がする。じっとしていたかった。(動き出すのは、惜しい)

深夜であった。階段に足音が聞えた。義兄が便所に下りて来たのである。蓮子は二日間向うの寢床から抜け出した。姉はいったん眠ると、ちょっとやそつとでは目ざめない。謙一が生れてから、いっそうねぼうになっていた。家の中は闇であった。闇の中には慣れて

いる。義兄が便所から出てきた。階段を上ろうとして、そこにいる人間に気がついて、「あっ」と小さく叫んだ。心の底から怯えた声だった。闇の中でふと人間を感じるほど気味悪いことはない。それが蓮子だと知ると、

「蓮子だったのか」

息を吸いこむように小さくいった。蓮子はだまっている。生理的要求を感じていたが、深夜なので気味悪がり、辛抱していたところへ偶然階段の足音をきいたので、床を出る勇気がわいたのであろう。義兄は二階に戻った。床についた。気にするともなく蓮子のようにすを気にしていた。いっこうに便所の戸をあける音もしないのだ。突然、義兄は起き上った。音を殺して階段を下りた。

「蓮子」

手さぐりによると、壁のところに蓮子もたれかかっていた。闇などおそれていなかった。義兄の手はやわからかで、生あたたかくて、そして十分大人びたものをつかんだ。引きよせると、身をもたせてきた。

「二階に来るか」

だまっているが、承知のはずだった。娘ごころに気付かなかった申訳のなさで、義兄は胸が熱くなった。女中部屋が近くにあった。階段を上り下りする気配に気がついて、それが主人のものと知れば、また眠るだろう。しかし、足音が二人分聞えるのでは、女中はへんに思うにちがひなかった。足音は一人でなければならぬ。

「おぶってあげるよ」

闇の中で背を向けると、生あたたかい重量がかぶさった。尻のところを大きく両手であてがひ、義兄はのぼりはじめた。重い。かますをかつぐようにはいかなかった。がんばるうちに出来ている階段だったが、二人分の体重のため、きめのこまかい音をたてた。いかにも重いものが板を踏みしめるようであった。二階に上ると、烈しい息切れがした。

「蓮子も偶然便所にいくところだったのか」

返事がなかった。義兄の背中へ、くまなく蓮子を味わっていた。無言がつづいた。蓮子の行為はことばを要しない。さらにそれを超えた。一途な娘の気持だった。蓮子ははだかにされた。

「階段を下りて便所にはいるのだ。時間をかけて、ゆっくり便所から出る。そして部屋に

もどっていく。ことさら足音を殺すようなことはしない方がいいよ」

二階できいていると、蓮子はいわれたとおり便所の中でかなりの時間をかけているようであった。便所を出て自分の部屋にかえっていく気配は、ふだんの調子であった。

蓮子の態度は変らなかつた。姉とむつまじく語りあっているのを見ると、義兄は安心が出来た。

つぎの夜、義兄が便所から出ると、蓮子がゆうべのように壁のところ立っていた。約束があつたわけではない。蓮子の意志であつた。背負つて二階に上るのは、一度でこりていた。

「外に出よう」

義兄がはだしで土間に下りた。草履をさがすふうもなく、蓮子もはだしで土間に下りた。蓮子の手をひいて、納屋を抜けると、月が出ていた。裏庭に出た。そこは自家用の畑であつた。畑の中を歩いた。女の手を引いて歩いている格好が道行を連想させた。倉庫の横に出た。月の影になった。倉庫の台石に腰をおろした。「はだしで気持悪くないか」蓮子が首をふつた。胸が苦しくなるほどいしかった。月の光りに照らされた部分とどぎつ